

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成27年2月号



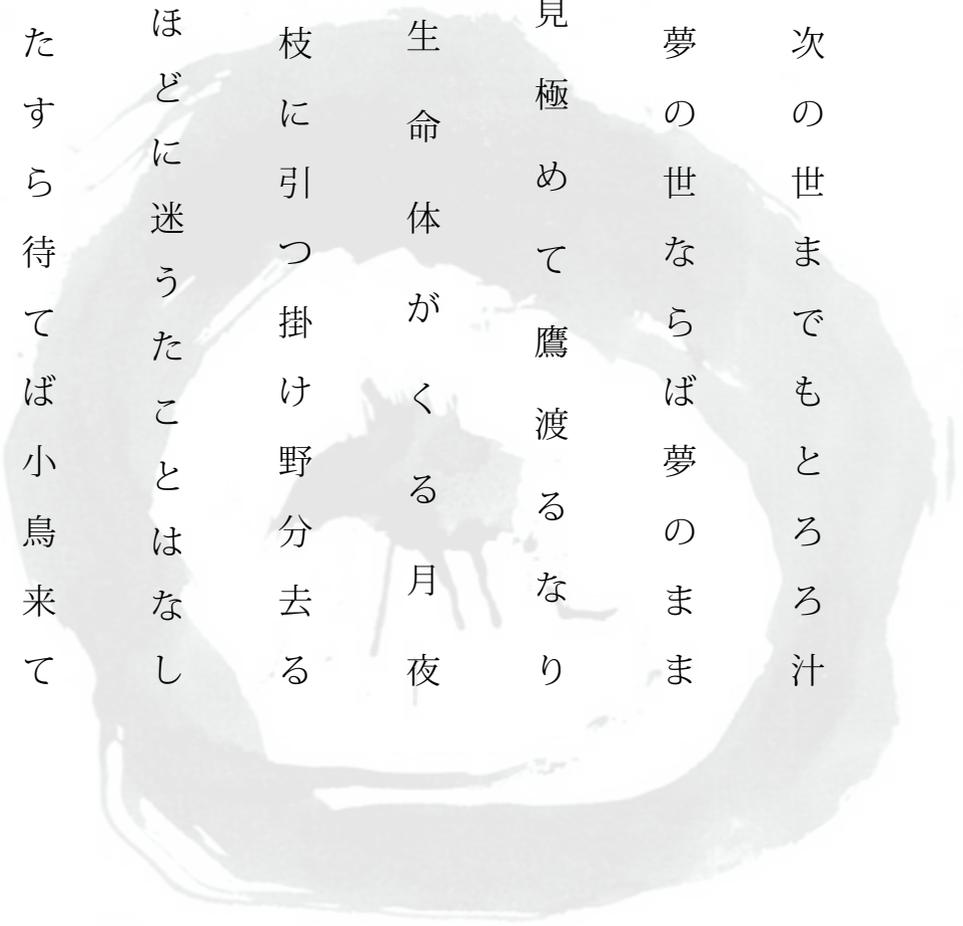
平成二十七年二月一日発行 第二十五巻第二号 通巻第三八四号 毎月一日二日発行  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

# 初雁

高橋将夫

人間も山河も冬の支度中  
ばつたんこ機嫌は音に現はれり  
栗飯は栗の話をして食べる  
ふるさとの秋は束の間かくれんぼ





人恋ふは次の世までもとろろ汁  
牛蒡引く夢の世ならば夢のまま  
現実を見極めて鷹渡るなり  
地球外生命体がくる月夜  
ビラ一枚枝に引つ掛け野分去る  
穴まどひほどに迷うたことはなし  
初雁をひたすら待てば小鳥来て



# 槐安集

水野恒彦

秋の蝶ゆるやかに光<sup>か</sup>げ乱さざる  
石棺に手を触るるなと鴟のこゑ  
白孔雀つぶさに光り秋の風  
蛇笏忌や降るほどの星移りゆく  
ものの影長き日暮や神無月

加藤みき

大徳寺納豆ふたつ飯二膳  
障子貼りこの部屋何かよそよし  
早足に日向ぼこりの前通る  
下闇にとけ込んでゐる青木の実  
御降りにお初の傘をさしにけり



中島陽華

新豆腐ちりとてちんと三味が鳴る  
虫すだくほうろく鍋に塩敷いて  
弾む声初瀬詣りのしめじ籠  
回廊に弁当ふたつ秋の虹  
竹の春金毛閣にほこりかな

竹内悦子

巻物は鳥獣戯画よ実千両  
赤松に蟬の骸や天高し  
先生の家の色紙や方頭魚  
枯蓮自由自在に生きてをり  
柗の花咲く夜の封書かな

雨村敏子

杜の樹にそれぞれ名前神迎ふ  
天辺に烏瓜聖天の真昼かな  
恵心院に向かうてをりぬ枯れを見に  
達磨忌の破蓮の水見てゐたり  
犀よりも大き顔して冬に入る

本多俊子

縄文人となり松藻を食べにけり  
人思ふ柿色のしづかなる冬  
しばしの恋か冬月に触れし雲  
青空の冬枯れの先に未来あり  
うかうかとの齡なり海鼠かむ

近藤喜子

童心に祝句集「明日葉」触ればかぼかと冬ごもり  
時空超祝句集「アヒドの腫」ゆ旅きらきらと小六月  
小春日や貝の舟おく砂の波  
深入りす寒林もつと知りたくて  
胸の火を燃やし続けて冬の蝶

瀬川公馨

外道かなずつしと重きマスカット  
明らけし銅いろの十三夜  
村びとの行つたり来たり紅べにてんぐ天狗草  
何事ぞ木の実木の実のビブラート  
老松の亥の子餅など待ちきれず

久保東海司

紅葉茶屋水車は水を裏返す  
時雨忌と余白に記す旅日記  
蝮姑の鳴く寝嵩の低き児の熟睡  
曼珠沙華御陵の堀を朱に染めて  
鴨の来て湖の寒さを拈げたり

柳川 晋

風花や先後遅速を争はず  
権兵衛の河豚釣り横を向く鴉  
αアルファより ∞インフィニティへ冬銀河  
闇汁を食らふて闇を知り得たる  
大切な日は真白な古日記

岩下芳子

鳩潜り潜りて水の国  
寒林にゐて透明な息となる  
IQはさほどでもなし鴟猛る  
甘からむ八手の花に群がりぬ  
電飾の街の昂ぶり冬北斗

近藤紀子

宇治橋を渡つてをりぬ神渡  
川波の黄葉のせて往きにけり  
雪吊の縄の匂へる邸かな  
越路行くや柿成り年は雪といふ  
日おもての千両燃ゆる黙の刻

岩月優美子

紅葉散る一生に曲り角あまた  
初冬の水郷辺り黙に入る  
落葉焚く炎に見ゆる過去未来  
冬満月幽かにフェニックスの風  
鷹舞ふや山河はときに牙を剥く

竹中一花

冬野菜はちきれさうなエコバッグ  
銀芒金小判草枯れて立つ  
冬の月一休利休の寺照らす  
寒紅や妓この訃を聞きし祇園町  
結界や小雪の息殺しゆく



# 槐市集

有松洋子

静脈の蒼さや総身冴ゆる夜の  
夕暮の肩たよりなき時雨かな  
影濃くば光もあらむ冬の道  
裸木や風に真つ向立ち向かふ  
風邪の熱こもる息吐き眠るかな

犬塚芳子

延延と山毛櫂宇の峰なり天高し  
どこまでも登りつめたる蔦紅葉  
山茶花にいやされてゐる女坂  
冬瓜の転がつてゐて憎まれず  
ポインセチア裏も表もなかりけり

犬塚李里子

寒晴や今生の先見えねども  
枯野原前に人なしうしろにも  
秘めごとやオリオンに打ち明ける  
フェルメールの少女の動き目短し  
冬の虹見しより魂のすき透る

井上静子

吟行に従いてゆきたる冬帽子  
水底を見てゐる時の鴨の足  
大根葉を絶品とする匠かな  
閑取の耳つぶれをる寒稽古  
梟や眉の山より画き足せり



今井 充子

立冬の窓に見えたる茜色  
くつさめを合図に羽織る伊予絋  
新雪のかんむりになり山映ゆる  
塔<sup>あたらぎ</sup>を遠見に帰る冬の月  
赤蕪や越後のかをり聞えたる

江島 照美

燃えきれず火の色のこす落葉かな  
神の旅愛の郵便ポストまで  
小春日やハートマークの観覧車  
三島忌に十七歳の我の居る  
霜月は季節がじんと深くなる

岡田 桃子

廃線の道へ手向けの濃紅葉  
ポツポ汽車走りし森や木の実降る  
黄落を曲がれば茅の屋炉火匂ふ  
古民家の素姓語るも楯明かり  
大楯の着火すばやき茅屋守

熊川 暁子

プラタナスの幹の迷彩冬隣  
案<sup>若狭起前吟行</sup>の定若狭に入りて時雨けり  
ひやひやと影追ひめぐる伽藍かな  
学僧の剃りあと青し峰の雪  
叫けぶが如き唯一本の櫨もみぢ

後藤 マツエ

大綿や農具を肩に帰る母  
枯蠶螂哀れと思ふ人の情  
冬葵戸口に凜と朝が待つ  
冬耕の田に餌をあさる鳥の群れ  
凡庸に生きて二人の温め酒

阪倉 孝子

身綺麗に生きる楽しさ返り花  
駄菓子屋に昭和のありて小六月  
夕映えの木の実降る音拾ひゆく  
またしても本屋閉ざさる一葉忌  
先陣の流れ滔滔冬来たる

# 槐集

## 高橋将夫選

朝市に露の世のもの並べ売る 枚方 熊川 暁子

みてゐたるいろはもみぢのちりぬるを  
水暮るる早さ寒さのうしろより

近江路のかるた散らしに刈田かな  
木の葉髪泣かぬをんなの泣きほくる

拜金も拜名もすて日向ぼこ 大阪 江島 照美

文化の日鳥獣戯画は今の世か  
労りは夙の中生れにけり

千年の和紙生む技や紙を漉く  
残菊の力の限り日を浴びて  
草々くさくさにおく強霜のひかり合ふ 岡崎 寺田すず江

枯野原夢の続きのありにけり  
縄文の火の色をして牡丹焚く

秋の山照る陽翳る陽深みゆく  
頤おとがひに安堵ただよふ霜夜かな

夕刊のポストに落ちる冬の音 大阪 有松 洋子

寒灯を点す誰かの影一つ  
いたはりや冬木に日射しやはらかに

冬濤を計る魚夫の目静かなり  
石路の花咲きかけてゐる昏さかな

鳳凰の羽ばたく天の高さかな 枚方 谷岡 尚美

日当りの表参道名の木散る  
神の旅やほよろず八百万の神湯屋に寄る

旅の荷に割る手立てなき鬼胡桃  
たましひの散るかに白き姫椿  
白障子開けるや決意新たにす 寢屋川 前田美恵子

大黒天の唇紅し小鳥来る  
北窓を塞ぐ活計たつきのほひ込め

雲ひとつ残し大空冬に入る  
置き去りの砲台の跡水澄めり

# 銀河往来 高橋将夫

◇『槐集』鑑賞

近江路のかるた散らしに刈田かな 熊川 曉子

実った稲田の中に、すでに稲刈りの終わった刈田が散在する田園風景。「かるた散らしに」が作者ならではの大景の把握。〈朝市に露の世のもの並べ売る〉の句の、「露の世のもの」という捉え方、〈水暮るる早さと寒さのうしろより〉の句の「水暮るる」。「後ろから来る寒さ」の感性もまた作者ならではのもの。

芳りは風の中生れにけり 江島 照美

風の寒さの中でお互いをいたわり合っている景。いたわりはこういう時にこそ生まれるのだ。

〈拜金も拜名もすて日向ほこ、文化の日鳥獣戯画は今の世か〉の句はそれぞれなかなかシニカル。〈残菊の力の限り日を浴びて〉の句からは生命力の強さが伝わってくる。

草々におく強霜のひかり合ふ 寺田すず江

草々に強く霜が降りている景。光り合う強霜はしんとした寒さを感じさせる。

〈枯野原夢の続きのありにけり〉の「夢の続き」は作者の夢、芭蕉の夢、そしてみんなの夢かもしれない。

夕刊のポストに落ちる冬の音 有松 洋子

夕刊がポストに落ちる音を冬の音と感じたという。作者ならではの感性。〈石路の花咲きかけてゐる昏さかな〉が、石路明かりではなく、昏さを捉えたのは作者ならではの感性。

神の旅八百万の神湯屋に寄る 谷岡 尚美  
八百万の神々も出雲への旅の途中に湯屋に寄るのだろう、などと想像しながら湯浴みしている作者の笑顔が目につかぶ。

北窓を塞ぐ活計のにほひ込め 前田美恵子

北窓を塞いだら活計の匂いがこもったという。生活感がよく伝わってくる。〈自障子開けるや決意新たにす〉の新たな決意に期待したい。

雪螢魂ついでいきたがる 犬塚李里子

一寸の虫にも五分の魂。そんな魂に惹かれるのかもしれない。

一天の青を揺らして鷹の舞ふ 吉田 順子

蒼天の鷹を描いた格調高い一句。

白樺林罪なき日射し秋遍路 犬塚 芳子

白樺林の純白の光はいかなる罪も浄化してくれそう。

色鳥や眼細める石仏 中田 禎子

色鳥に注がれる石仏のあたたかい眼差しがそこにある。

いつまでも自分捜しを寒鴉 柴田 靖子

一生は自分捜しと思うが、寒鴉もそうだったのか。

柀の花まばたきて小さく散る 山根 征子

「まばたきて小さく散る」が柀の花の散るさまをこまやかに表現している。

苔玉の命抱きて冬に入る 時澤 藍

苔玉に包まれた草花の根に命のぬくもりを感じる。(以下略)